
ストラッカーズ

壬宇羅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ストラッカーズ

【NZコード】

N9325T

【作者名】

壬宇羅

【あらすじ】

野球大好きツ娘 えりちゃんのがんばり物語

ズバーンとグラウンドに響く音。

静まり返った場内に、響く試合終了の音だ。

スコアボードには〇対1の文字。

しかし、試合内容は圧倒していた。

初回こそ、四球による進塁を許してしまったが、その後の被安打数は0。

マウンドに佇む少女は、額の汗を優雅にハンカチで拭うと、ニッヒはにかみ、ベンチの方へその視線をやった。

視線の先では、監督の満足そうな顔。

さも、当然であらうと言つた表情で合図を送るチームメイトの姿がある。

レギュラー陣もマウンドに集まり、彼女を称えた。

彼女の名前は、斎藤えりな。

現役女子中学生の中で、右に並ぶ野球プレイヤーは多分いないだろう。男子であつても、彼女を止める事の出来るものは多分そっぽいハズである。

そう、彼女こそが、天才野球少女えりちゃんなのだーー！

「えりー、また野球ばつか見てえ…、宿題やつたの？」

「今やつてるよおー、みながらでもいいでしょー？」

テレビには、野球中継が流れ、えりは、それを食い入るように見る。宿題である。ワークブックにはまったく手を触れず、握った鉛筆は手汗で濡れている。

「さつはは、いいじゃないか。好きなんだし、ちよつとくらい好きにさせてあげても…」

「もっ、お父さんは、さつやつて甘やかせ過ぎなんですよ…まつたく

く

呑気な顔で、笑う父親と、それを呆れる母親。

母親は、それ以上何も言わずに、食器を洗う手を動かす。

「それで、えり、部活の方は決めたのか?」

「え?…うーん」

父親の問いかけに暗い表情で答え、えりはそれ以上は口にせず、再びテレビ画面へと目をやる。

父親は考えている。

確かに、小学校時代は、野球をやらせていたし、それが彼女の為だとも思っていた。

しかし、中学に上がれば、そもそもいかない。

男子と女子、男と女といつのは、おんなじ成長の仕方をするわけではない。

中学生にもなれば、腕力、持久力、体格、適正体系…様々なものが女子を上回つて男子の方が伸びる…。

えりは確かに野球が好きだ、しかし、中学に上がつてしまえば、女子に野球をやる環境といつものが果たしてあるのか。答えは簡単だ、NO。

今、女子中学生の部活動に野球といつ活動項目はない。

あつても、ソフトボールが限界だ。

しかし、えりはそれでは物足りないのだらつ…。

「えりした？　えり？」

「ううん。なんでもない…なんでもないの…」

野球中継を眺めながら、父親はまた、考えに耽つた。

「えりー、早く起きないと遅刻するよー」

髪をぼりぼりと搔きあぐびをかきながら姉の、明菜が一階から降りてくる。

「何言つてゐの、お姉ちゃん。ボクはも起きつたよー。」

「うわお、早い…なに?」どうしたの、いつもよりメッシュチャーシュ…なんがあるの?」

「学校」

いつもより早い…いつもが、姉がこの時間に起きてくれる事の方が珍しい。

「えりこ、お姉ちゃん」

聞くと、姉は思い出したかのように叫ぶ。

「ああ、私、今日学校休みだからねえ」

一瞬にやとした表情で、いつもと、众所の母に朝食を要求し、済ました顔でゆっくりと、運んでくる。

「えりは、今日から体験入部なんだって？　なにするか決めたの？」

「じーぜんーー もち、野球部なんだよーー。」

そもそも、当然のことと言つたかのよつて、鼻を鳴らし血騒げに叫びするHリの表情には、なんの曇りも見当たらない。

新聞を読んで、そもそも、そのことには関心を示さない態度をとつている父親は、その一言で拍子抜けした。つい、一言じばれてしまつ。

「えり…、お前…野球やるのか?」

その一言に周囲も同意のよつて、一回えりの回答に耳を傾ける。

「 もちろんーー。」

それだけ聞くと、明菜はテレビのリモコンをピタピタ変え始め、父親はそうか…とだけ言つて、再び新聞に目をやる。妹は、よくわかつていないうつて、ふーんと、納得すると。朝食のトーストをかじる。

「 つて、本氣!？」

明菜は、たまらずに数テンポ遅れで突つ込みを入れる。

「 当然でしょ、だつて先生言つてたよ、やりたい部活に入りなさいつて」
「 でも、野球部なんて、男子ばつかでしょー?」
「 だつて、野球がしたいんだもん!」

父親は、新聞からちらりと、視線をずらし、一人の様子を伺つ。

えりは、一点張りで、頑なに明菜の言葉を駆逐し、明菜は次第に物言いを諦めた。

「えり、そもそも、時間だぞ」

そつ、父親が呟くと、えりは、慌てた様子もなく、かばんを手に玄関へと向かっていった。

「お父さん……いいのッ……？」

「……も悪いもないわ……えりが、やりたいくて言つてるんだから止めるまでもないだろ？」

「それはそうだけど……」

そつ言つと、明菜はなにかやつきれいな表情を浮かべながらも、朝食のトーストをかじつた。

「はよー」
「あ、おはよー。今日はなんかはやいねー」「ん? ……やつかな?」「うんうん、早いよー。だつて、まだ八時だよー?」「でも、部活始めたらいのくらに普通だし、別に早くはないんじやない?」「……つて、まだ、部活始まつてないんだけど……」

時計の針は8時を指し、一年生はまだほとんど登校を済ませていな

い。

部活動をしている、2、3年生が、ちいはりと、教室棟へと向かい始めているところだ。

「うん。えりちゃんは、どんな部活に入るのかな？」

「ん？」

「いや。よかつたらおんなじ部活に入らうかな」と思つてねえへ、

「へへへ」

「ああ、ボクは、もう決めてるよ。もちろん、野球部ね」

「え…へー」

野球部という単語が入った瞬間に、会話が途切れる。

彼女は、えりが小学時代に野球に没頭していた事は知つている。しかし、それは小学校までの話。

中学になれば、ソフト部。もしくは、それ以外の部活に行くと思つていた。しかし、その予測ははずれ、男子部の野球に入ると言い出したのだ。

「で…でさ…野球部つて入れるのかな？」

「ん？…なんで？」

「だつて…男子ばつかだよ?…女子が入れるのかなつて…」

「大丈夫だよ…だつて、先生は、好きな部活に入りなさいって言つてたよ」

「そりゃそーだけど…」

彼女は、そう言つと、その会話を打ち切り、話題をそらす。

「ところどとー、えりは、昨日バッティングセンター行つた？」

バッティングセンターといふと、去年から建設が開始され、つい昨

日オープンした、色々と新しい機能を取り入れたらしい、バッティングセンターの事だ。

「ううん…行つてないよ…かなは行つたの？」

「いやいや、行つてないよー。あそこ、いろいろと新しい機能があるみたいじゃん…えりなら行つたかなあと想つて」

「うーん、ボクは、どっちかって言つと打つよりも、投げる方が好きだしねえ」

そういうと、球を投げる格好を見せてみせる。

「だよねえ…でもあそこ、なんか、投げる方もあるらしいんだよねえ」

「え？ ホント！？」

「うーん、チラシでちらつと見ただけだからわかんないけど…なんか、投げてる人の写真みたいのがあつたから…そつかなあ、と思つて」

その一言に、えりは興味を惹かれる。

バッティングセンターというのは、普通打つだけのものだと思つていたが、投球があるのなら是非とも行つて見たいと思つた。

「へー。ちょっと行つてみようかなあ」

そういうのとほぼ同時に始業前5分前を知らせる鐘が鳴る。教室には、もうすでにほとんどの生徒が入室を済ませ、思い思いに級友とだべつている。

「じゃあ。今日帰り寄つて」

かなは、その申し出を待つてましたといふかのよひと、笑顔で頷き、両手を上に突き出してみせる。

「じゃ、放課後ねえ」

「あ、でも、今日から体験入部じゃん…ビリジョウ…」

「だいじょーぶだつて、体験入部は5時まで…それ以上はないから…その後いこ?」

「うんッ!!」

始業の鐘が校内に鳴り響き…それとほぼ同時に担任が、教室へと入つてくる。

「はい、号令」

「きりーつ。礼」

礼が終わると同時に朝礼の時間が始まる。

担任は、持ってきたメモに目を通すと、本題を口にする。それは、今日からの体験入部についての話だ。

「えーと、今日から体験入部が始まります。みんなは、もう部活動の方は決まっていると思うので…そちらの部活動の方へ行つてください…以上。…あち、齊藤はちょっと話があるので、放課後に職員室に来るよつと話があるんで、放課後に職員

室に来るよつと話があるんで、放課後に職員

そつ言つと、担任は、適当に切り上げて、1限の授業へと向かっていった。

6時間目終了を告げる鐘が鳴ると、クラスの生徒の大半が、各自の関心のある部活動へと向かっていく。

しかし、えりだけは、今朝担任に呼ばれたため職員室へと向かっていた。

「じゃあ、えり、私部活見てくるから…ゴメン」

「うん…じゃあ、終わったらねー」

はつきりとは見せないが、若干の不安そうな表情を浮かべるえりを中心配して、生徒玄関までは付き添ってくれた、かなも、部活へと向かっていく。

友人と別れると、急に心寂しくなる。
どうしようもなく不安になつてくる。

担任のあの口調だと、多分、他のみんなのように、女なのに野球とか、他の部活はとか。きっと、野球部に入る事に批判的な意見を言われるのだろう。

「でも、決めたことだから」

そう呟くと、瞳に力を込め、職員室へ力強く向かっていく。

「失礼します」

ガラッと職員室のドアを開くと、目線の先の席には、担任の姿があった。

見ると、担任は帽子をかぶり、野球部のユニフォームに身を包んでいる。

野球部の顧問なんて、しつかり見てなかつた……。まさか、担任が、その顧問だつたなんて……。

「おーい、齊藤？ あひれるかー」

目の前で手を振りながら、呼びかけてくる声にはつと気づく。田の前の担任からの呼びかけだ。

「は…はー…」

慌てて返事を返すと、担任は、せつままで見せた、呑気な表情を一転させ、真面目な顔つきへと変える。えりの予感は的中しそうだ。

「齊藤…お前、野球が好きなのか？」

「…はい」

「どうして？ 女子だったら、他にも色々あるだろ…外なら、ソフトボール…他にもテニスやら、ハンドボール…中でも、バスケやバレーや色々…なんでも、野球にしたんだ？」

そこで、えりの言葉が詰まる。

野球が好きだから…。

それは真実だ…しかし、そうは云ふとこりで、ならソフトボールでいいじゃないかと言つ、回答になるのだらつ…だつたら。自分がどう野球が好きなのかを証明してみせなければならない…。

「そう…ですよね…、女子が野球とか、可笑しいですよね…ふざけてるつて思つちゃいますよね…」

「いや、そこまでは…」

「言つてますーー！」

担任の表情に焦りが見えてくる。

えり、自身がどんどん自分自身を追い詰める発言をする為、回りの視線を意識してしまひ。

（おいおー…、まずいだろ…こんなの他の先生に見られたら…どう勘違しされるか…）

田の前の女子生徒は、必死になつて何か訴えたいみたいだが、言葉が出てこないようだ…今は何も話さない…。

しかし、また一度自分自身を攻めるような事を言われると…それこそ、担任である教師にとつては不利益になる。

「わかつた…じゃあ」いつよつ…、いいか。入部は認める

その一言に、えりの表情が急激に明るくなる。

「しかし、部員としてでは無くマネージャーとしてだ…いいか？」

マネージャー…その言葉が引っかかる…マネージャーでは、グラウンドでプレイが出来ない、野球ができない…。

「マネージャー…ですか？」

「ああ…大体…女子には野球なんて、できないだろう…練習は出来ても試合に出られない…そんなの嫌だろ？」

えりは、その一言に火がつく…これまで、小学校時代にやつてきた事すべてを否定された気がした。

小学校時代…それはもう真剣に野球に取り組んだ…当然クラブには男子も多くいて…身長こそ勝るものとの体格が負けていたり…完全

に負けていたり…そんな、ハンデの中でも必死に頑張つて来たあの田々を、すべて否定された気がした。

「先生…ひとつ…ですか？」
「ん？」

マネージャーと面つら妥協案を出す」と、今回の話にまともにがつくとかをくくった教師は…半分笑み含みで応答する。

「中学生野球に女子生徒の出場制限と面つらのは無いこと願つのですけど…」

「そりや そりや…でも…そんな生徒いないだろ？」
「私は、野球がやりたいんです」

それだけ面つらと、えりは、職員室から出て行く。

残された教師は、面倒だと言わんばかりの顔をして、その後ろを見送った。

えりは、面つら、えりを入部させるしかないとよつだ。

えりは、職員室から出ると、半分鼻歌を奏でながら、先ほどまでの陰鬱な気持ちなど一切え、野球部へと向かっていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9325t/>

ストラッカーズ

2011年6月15日01時02分発行